

時々、ふと怖くなる。

あまりに膨大な時間の中で、何も無い広い広い空間に置き去りにされたような気分になる。時間に追い詰められているような気がして、何もかもがもどかしくて。だんだん薄れていく記憶に、なぜだかいつも泣きたくなるのだ。どうしようもないことを知っていながら、時間の流れに逆らいたくて、記憶を留めておきたくて。流れていく時間が恐ろしくて、死んでいく記憶が悲しくて、私は泣く。私はいつも、どうすることもできない非力な自分を恨んでいる。

今ここにいる自分を形成する大切な記憶を、すべて保存しておきたいと思うのに、どうしたって記憶は薄れてしまう。怖くて、どうしようもなく、頭の中に溢れて廻り始める言葉たちを、私は書き記している。書くことで、頭の中で居場所を失っている言葉たちが、少しずつ整理されていくような気がするのだ。ノートや携帯のメモリーという居場所を見出して、言葉たちもほっとしているのかもしれない。

泣き出しそうな夜も、特に理由もなく苛々する日も、不安で仕方がない朝も、書くことで私はなんとか生きている。心がざわついた時、頭の中に言葉が溢れた時、私は夢中で言葉を記すのだ。そうすることで、張り詰めていた心がほんの少し弛緩して、やっと小さな隙間ができるような気がする。グッと詰めていた息を、ようやく吐き出すことができるのだ。

考えること。

私は考えることが好きだ。考えている間、「私は存在している」と強く感じることができる。頭に浮かんだ言葉は、その瞬間を逃せばもう二度と書くことができない。たとえ似たようなことをもう一度考えたとしても、その瞬間とまったく同じものがこの世に存在することは二度とないのである。

だからわたしは、もう二度と会うことができない過去の自分が考えたことを、もう二度と書けない言葉が死んでしまう前に、急いで書き記そうと思う。

遺体を棺に収め、化粧を施し、大切に送るように。

書くことで、消えていく言葉を丁寧に葬ってやる。それらがこの世に存在したことを証明するために、誰にも知られぬまま葬り去られぬように、言葉の墓を作ってやるのだ。

私は、それらの言葉が生まれたこと、存在していたことを記録することで、私自身の存在が見出せるような気がしている。過去の私が考えたことを記録することで、自分は確かに存在していると証明されるような気がするのだ。

私が考えた言葉は、私しか知らない。だから私が忘れてしまったら、それらはこの世に存在していなかったことになってしまう。そんなのはあまりに悲しいし、とても勿体ないことだと思う。だって、それらはもう二度と出会えないものなのに。

だから、私は書く。

私の中の言葉が存在していたことを、自分が存在していたことを証明するために。

「私はここにいる」と、誰かに伝え続けるために。